

参加者一覧	02
連作欄 8首の連作 自由詠.....	03
一首評 「そらよみ」.....	13
テーマ詠欄 「冷」	14
短歌リレーコラム 「望遠鏡」	16
リレーエッセイ 「いちごいちえ」	18
次回予告・編集後記.....	19

Utagawa

2025.
September

no.

28

う
た
そ
ら



泳二	@Eishimada	歌島孟	@Sinn1990	がね	@amicus08	廻れ井戸	@kaionjioe	川瀬十萌子	@nagikawase	北谷雪	@ktaya_misomiso	橘高なつめ	@coconutkiko	香子	@kyoko_shogi	久保田毒虫	@dokumu44	新井きわ	@kiwawawa0420	井倉りつ	@uta_litiz	石川順一	@Hite157	今紺しだ	@imaconsida	宇祖田都子	@shinsyutu2020	梅ふふむ	@umefum
----	------------	-----	-----------	----	-----------	------	------------	-------	-------------	-----	-----------------	-------	--------------	----	--------------	-------	-----------	------	---------------	------	------------	------	----------	------	-------------	-------	----------------	------	---------

寿司村マイク	@xHsDNR4wv1wj8M	砂山ふうり	@petit chante	たえなかつす	@suzusuzu2009	多香子	@hazuki1815	千原うはき	@kohagi_tw	内藤うへ	@naio_raku	中村成志	@nakam8	西淳子	@jacky244Ray	畑 依裕	@aieohimeco	薄荷。	@hirochin_dos	廣珍堂	@Ymck6rhjEZgwg	笛地静恵	@momoka_fukuyama	福山桃歌	@momo	古井 朔	@Pentastar	坊 真由美	@mao_or_mana	御糸さち	@kamin_plz	水上歌眠	@nkrmm	南の島	@m_lja_o	水也	@mereumumai	六厭めれう	@mucci2022	村田一広	@Nq4oEv95glcRpu	森内詩紋	@lumina_hatarake	ルミナ	@saku_furui
--------	-----------------	-------	---------------	--------	---------------	-----	-------------	-------	------------	------	------------	------	---------	-----	--------------	------	-------------	-----	---------------	-----	----------------	------	------------------	------	-------	------	------------	-------	--------------	------	------------	------	--------	-----	----------	----	-------------	-------	------------	------	-----------------	------	------------------	-----	-------------

計 51 名

たくさんのご参加
ありがとうございます！

連作欄

8 首の連作

自由詠

うたそら

トータムボール

新井きわ

綴じられた日記帳から溢れ落つ文字のはらりと五十歳の恋文
手をつなぎあなたが夏とつづやけばわが言語野に葉は生ひ茂る
夢のなかにバグがあるならもう一度逢ひたしきみのドルフィンスマイル
つるつるの卵みたいな膝をしたきみを眼窩に棲まはせてゐる、まだ
快速の吊り革一つにたましひを預けしきみは透過されてく
季めぐりきみと出逢ひし鴨川に桜は変はらずイルミナントなる
難聴の内耳にきみは棲みてをりわが名を呼びぬ あさ、ひなか、よる
生きてゆく限りは続く希死念慮 あなたと刻んだトータムボール

Defective

井倉りつ

正常に動作「できない」欠陥を愛し合えると思った 檸檬
「おれ、人に愛してるとか言えないんよね」ってわざわざなんて言ったの？
人間をこわがるあなたのそばにいるために感情機能を壊す
ありがとうつてほえみながら締められた首から腐っていくような日々
あなたにはあってもなくても変わらないことにも気づかないもの
まだ好きで声が聞きたい日があつてずっと金魚のぶくぶく見てる
言いあつていた頃みたいに「おやすみ」をちいさなちいさな声で ひとり
いまはわたしだけがあなたを好きだからわたしだけ祈るしあわせでいて

家族

石川順一

寺に日が当たり植物旺盛でマンモスよりもヒヨドリがいい
見通しが良くなる鳥が好きになる石畳には蟻の巣出来て
筍草少し大きくなりすぎて小さき二つを隠してしまふ
チェアマンは会長の意味ハンカチが沢山トイレに落ちて居るかも
アイダホの意味を教えて欲しいからシーターよりもウーエーが好き
柿の木の花が結実しないからヒヨドリ来訪少なく成りぬ
アイス食べ我ら家族は繋がりをぬ木の棒を虫の墓場にはせぬ
捨てられぬゴミではなくて捨てられぬ過去ではなくて捨てられぬ今

スイング・バイ

今紺しだ

返信という貝殻に耳をあて君の思考の波音を聴く
卓上の君のソーダは澄んでいる どうして会ってくれたんだろう
降り出した雨が水面に描く円 言葉になる前に消えてゆく
落下する林檎の、あの目そらされた瞳の、意味に気づけなかった
スイング・バイ 僕の引力を利用して君は宇宙を飛び去っていく
さみしさの新月 三日月 上弦の月 十三夜、散歩に出よう
酸化鉄の赤さだ夜のブランコの古い鎖も遠い火星も
満月が光の線を吐き出して遠い線香花火に変わる

屋上猿部28

宇祖田都子

見下ろせば葉陰が光る中庭の在り処を示す幻の池
中庭があるはずのない学校の図面に今はもうない海が
ここ昔、そうねだいたい十五億年くらい前海だったから
後輩がぶつ倒れてる屋上で猿の泳ぎ方を忘れる
飛び込めばわかるんじゃない？ 中庭の池が昔を覚えてるなら
飛び込んだけれど飛沫も音もせず予鈴 なんにもなかったみたい
見上げればあんなに遠い屋上のフェンスを越えてくるビッグウェーブ
わかんない わかんないけど屋上も猿も私もわかんないけど

サタデー・ナイト・クラブ

梅ふふむ

あの曲が入ってないとむくれてるプレイリストのガキは自分で
地下階段ポスター落書き口ピアス異界にハート縮み高鳴る
夢に見たクラブぎらつく照明と爆音踊り方は知らない
薄明かり黒い路面の湿り気に信号の青始発にはまだ
早口で強めにNOを突きつける歩道にゆるりすり寄る車
カラオケは飽きたしプリは撮れないし川べりで蚊の餌食になって
朝マック偽物っぽいタマゴとか半端にぬるいカフェオレが好き
日曜の遅い朝日がほったのラメに光ってまた遊ぼうね

Make Noise!

歌島孟

白球が見えない、そこにかけられた思いもたぶん分かつちやいない
バッターを打ち取る足は刈る鎌のように鋭くふりおろされる
A song for occupations スタンドで物売る声も歌に聞こえる
草の葉でいたい、あらゆる人たちが共にウェーブをつくるさなかで
狂騒の時代があった。球場はGet Loud!!に刹那沸きたつ
一瞬で世界の変わる兆しして身体で受ける陽射しが重い
あめつちに独りたたずむビッチャーの投げるボールでゲームが動く
あつ、と言いつべての人のまなざしが同じく空を飛んだ気がした

造られた墓

がね

造られた墓造られた花祖父は今年も同じ形をしている
姪っ子も父もオムツをする昼間 ゴトンゴトンと氷ができる
ざりざりとブラシをかける玄関の家族の分の足跡を消す
水滴を残らず拭いて母さんは遠く離れた孫心配す
左手の指をもたない青年が羽ばたく夏を祖父は知らない
使うから死語にしないで 東京はネオンサインで星が見えない
誰一人知らないけれど父さんは今年も長崎を応援す
迷わないように光は燈される だとしたら祖父も見ている花火

サマーセミナー

涸れ井戸

塚口の元女子大で学祭のような真夏のフィエスタがある
駅からの道に迷って年配のグーグルマップ使いに付いてく
うん百という教室が開かれて市井のセンセイたちが張り切る
朝イチのクラスは「芥川賞をとろう」滅茶苦茶すてきなテーマ
中一の先生の鉱石講座老若男女で満席やん
昼休みガストに寄るが昔日の倍額のハンバーグにがっかり
五時間の授業を受けてサマーセミナーの尼ヶ崎氏の熱気に敬意
塚口の駅前で靴買い替える足裏揉みの講座の余波で

Flower Moon

河岸景都

自分から進んで選ぶ遠回り、ビルの隙間に花の満月
貴方とは違う生き物であることを知ってしまった穏やかな午後
生きているのはこんなに怖い今日もまた魔法のような日差しに焼かれ
呼吸から言葉へ変わる瞬間に喉奥で鳴く小鳥の姿
足はもう歩行するだけ地球儀の遊び方すら忘れてしまつて
菊の花ばかり貴方に飾るころ春を初めて知る声がある
キュビズムの街に住む人 最後まで雨の匂いを分かち合えずに
本当はずっと前から自由だと飛ばない鳥に諭されている

バラッドを聴きなごう

橘高なつめ

ミッキーの目は小さいが安物であればあるほど涼しいTシャツ
影の無いまばゆい午後に虫ばかり多いバス停その横に立つ
一生に私は何度見るだろう蝉が土から出る瞬間を
ガラス越しリフレインする蝉の声くりかえし読む同じページを
長椅子を通り出して夕涼み薄闇に聴くサザンのTSUNAMI
音楽のとだえた後も触れている針はざらざら砂を降らせる
さつきまで夏だったのに消えそうだ指に残った花火の匂い
潜水を終えたばかりの息遣いしながらスマホから目をそらす

Ipomoea nil

香子

ガラス越しに冠菊^{かむぎく}が咲き誇り眺める君の横顔きらめく
見せられぬ醜^{みにく}きものがあるゆえにピアスと笑顔で目くらましする
正解も安堵も保証も要らないと静かにその手を握り返した
チヨコレートならば跡形なく溶けてそのまま共に消えただろうに
満たされた後に迎えた文月の夜がこんなに独りきりとは
あなたにはあたしは些細なアクセント フォルティシモ無き二人の楽譜
「もう一度」「もう最後」とが交差するどちらに振れても君に従う
丁寧に折りたたんだのに開き見るあの日の記憶は青き朝顔

冥王星が泣いてる

久保田毒虫

宇宙には僕の知らない天体やお星様などあるのだろうか
宇宙には僕の知らない惑星や彗星様もあるのだろうか
宇宙には僕の知らないお月様太陽様もあるのだろうか
宇宙には僕の知らない景色とか涙なんかもあるのだろうか
もしかして知らぬ景色があるのなら僕は宇宙に翔んでゆきたい
もしかして知らぬ涙があるのなら僕は宇宙で傘になりたい
早く翔べ早く翔んでこの心冥王星がきつと泣いてる
早く翔べ早く翔んでこの心何も知らない何かが待ってる

メッセージ

くろだたけし

本文より凝った字体で記されたページの隅のページ番号
余った味のないまま食べてみてキャベツの固いところのキャベツ
隣人のスマホが呼んでいるようなそれは弱々しい虫の声
枝枝がねじれて伸びてゆくさまの花より強いメッセージ性
やや明るくやや暖かいペリカンの口のなかではとても眠たい
寝転んだわたしがもしも「大」の字に見えたとしたら裂かれています
一生に一度限りのひと月の無料期間の残り一日
高くない木だと思っていたくせに見上げるとまぶしくて見えない

ないね

小藤舟

純粹がひとに障ると知らぬまま頑張りかたがわかるうちはね
夜の砂場にドロップス散らばっていて溢れそうもないこともへ
花鋏^{はさみ}だろう、あなたの両腕は傷つくためにしなやかにある
遠くから光っていてよおはようを交わすだけの生きているひと
許してって言わないで 癒してって言わないで なにさまたち
選ぶといい、その手のなかの三つ編みをいくつ編むかを星の子として
すり抜けるには頑なな足指で生き物くさい地下コンコース
角部屋で真夏みたいに溺死して知らないことは偉くなかった

ぐるぐる

坂口栞

夜空にはもう届かないさらわれて行けなくなった夜の散歩に
右足を出せばおのずと左足が出るこのリズム手をたたきたい
山国に生まれたから水平線を感じる夜のまつつつすぐな道
海の底歩く幻覚やつてきて歩くも泳ぐもささいなこと
歩いてる輪郭うすく歩いてる感覚だけがただ歩いてる
足をぐるぐる進めれば自転車漕いでる幻覚やつてくるくる
自転車映画みたいに飛んで空泳げる人になりたかった
もう夜に散歩は行かないここではないどこかへ行つてそこで飛びたい

ネオ

西鎮

ビーサンのトンクの痕がうっすらと残つてそれが秋のはじまり
海からの風が止むときほんとうの夜が来る、つて誰かが言った
あわせ鏡の洗面台のずつと奥の耳がぼくではないみたい
バスプール 誰もただしい行く先を知らない白線ばかりの街の
身体ならくれてやるから、的な云い方ではじまるあなたの踊り
かつちかちだつた井村屋はもうどろどろで結局あなたは泣かなかつたね
スーパ一の鮮魚売り場のリズムから毒されたまま帰りがつた
ネオ渋谷系って言うときもうずっと昔の海の日焼けみたいな

観蓮会

桜さくら

蓮好きのあつまる旅は晴れるから麻の帽子と日傘をつめて
関西の人ら待ちおりひとり着く敦賀駅からバスに乗り合う
昼食は各自で、ならば懐かしい声の隣に蕎麦を啜つて
「本日はテレビ取材が入ります」今盛りなる花はす公園
シャッターをきれば緑の匂いして越前の風 立葉をゆらす
ばさばさとマンモス級の葉を掲げ象鼻杯から地酒滴る
真夏日をおりて素顔にほどかれて湯あがりに着る推しのTシャツ
いくつもの集合写真 早朝の花の香りをLINEに残す

S (UNAYAMA) F 令和まほろば

砂山ふうり

心ない心からある心へとAI美空ひばり何処行く
チェックインチェックアウトもただ独り街から部屋から街へ
生き繋ぐネットカフェの暗闇へ帰れぬひとの重き春雨
手の形アフリカに似て握手する時ふと人の温もりを知る
なれるなら子の憧れの職業のユニチューバーに我もなりたし
我が町に玉虫の馬具出土して六世紀末へ心馳せゆく
疑えば疑うほどに世の中は陰謀説に傾いてゆく
世の中を言い訳にして一日を近ごろ雑に生きてはいないか

許してあげない

たえなかず

ほおづえは見えない涙を止めるため、なんて静寂^{しじま}の中で言うなよ
全休符ばかり心に落ちていてうれしくてついつまりてみる
手のひらの生命線でしっかりと握るナイフのかがやき眩し
起きぬけの世界がひどく白かった 死にきれないってこんな感じね
いつだって話さなくても分かり合えてたから別れの言葉もなく
ピアニシモで別れたからってわたくしを弱い女と思わないでね
あかるくてでんわのこえはあかるくてつつじの蜜を吸い上げるよう
あつカロリーメイト、ポカリで夏の夜をやり過ごすのもまだ申告制？

夏は続くよどこまでも

多香子

この暑さどうにかしてよ入道雲 猛暑の街に雷雨をたのむ
猛暑日が続けば元気な子猫さえバテ気味になって私とひるね
カワセミのひるがえりゆく羽根の色もう一度見たいあの溪流に
口先の平和とせせら笑いつつ心の内に捧げる黙祷
この酷暑甘い氷菓をがまんするダイエットなんてやってられない
波に乗りふざけて囃んだと反省のイルカの哀歌がたまに聞こえる
夏の日に恋に燃えたら消火にも時間かかって手に負えないわ
気合などとうに入らぬ夏の昼 クーラーの音遠くに溶けて

嫌いなのは夏じゃない

中村成志

蝶のしっぽ蜻蛉のしっぽ輸送機のしっぽ見上げる温気の風に
夏を殴り夏になぐられ向日葵がつくり垂れる八月の末
陽だまりへ近寄ることさえ怖くって脚はまだ地を踏んでいるかい
缶の肌にじわじわと浮く水滴が五面の指の腹へと浸みる
くらぐらの雲が河へと重なって流れの中のさざ波一面
鼻面を、鼻だけを柵の隙間から突き出し鳴いて青葉が臭う
出しっぱなしの腕を湯舟へ沈めたら表紙が反ってゆくように熱
好きな人好きだった人好きになるはずだった人 3マスもどる

おひさしブリーフ

西淳子

あ、焦がれ きみの炎は強すぎて消せたもんだとおもってたのに
緊張の糸で刺繍をすればほら案外悪くないもんでしよう？
ポケモンのタマゴの「おや？」が「親？」だって気付いたときのこれが母性か
民宿の座敷わらしをうらやましく思うラブホの地縛霊です
こつち視て♡ 廃墟にうちわが落ちていて靈感あればファンサできたのに
神様の副流煙を呑み込んで「へえーいいもん、吸ってるんすね」
脚光を浴びるつもりが逆光で、まあ、でも、あたしらしくて、いいか
昼なのに月が見えるの、そういえばきみのこと愛していたなって、

ふたりめ

田邊葉月

ひとりめは特別末っ子は格別ならば等しく愛せるはずだ
BPM170の心臓がわたしの体を牛耳っている
つわりとは言えず風邪だと嘘をつく母に毛布をかける4歳
来年は肉2倍食う。すぎ焼きを横目にみそ汁啜る年末
血腫 出血 流産 早産 物騒な画面を閉じる真つ暗な部屋
絶対に生きて帰るね「うんだあと なんかいねたら かえってくるの？」
幸せな睡眠不足（と言いつ聞かす） 中からも外からも蹴られて
ばかばかのねえねのおててがすきなね大きなお腹越しの戯れ

かろうじて夏

千原こはぎ

まだうまく眠れていない二回目の夏 そういえば星も見えない
目覚めたらまず霧吹きで水をやるわたし以外の生きてるものへ
異質さが日常になめされてゆくあなたのいない世界が世界
いつ星になるんだろうかどこまでも死からは遠い夏の日のカフェ
誰も彼も喪失を得て人間を濃くしてゆくの、過酷すぎないか
すぐ横に伸びきったまま眠る猫だけが遺されているリビンゲ
また深く手をつなぎあい歩くひとがいるんだろうか、いない、いないな
月一度だけ外に出て飲むビール まだかろうじてひとでありたい

象の背中

薄荷。

朗らかなサファリパークはま昼間で動物たちの歌声ひびく
近づけば近づくほどにけおさるる圧倒的にこれはぞうさん
何となく靴で踏むことためらる豊かに丸き象の右肩
うす桃のごわごわとした象の背にそつと座れば世界は広し
耳裏をそつと蹴られて大人しく象は左へゆっくり曲がる
象つかひマレーシアより来しといふ彼のまなこのいと穏しき
はつ夏の象の背中の筋肉の頼もしき揺れに身を預けたり
ぞうさんは優しくりりねんごろに運動場を廻り歩いて

自由律短歌 夏

ひなお

飛蚊が増え読書に障るようになった 楽しみが一つ消える
耳 音楽は諦めがきく 目 読書が出来なくなるのは辛い
夏とは言えまだ8時だがシャッターに触ると焼けるように熱い
坂の上から振り返って見ると我が家の瓦が夏の光に輝いている
ふと思う外来種の植物や動物は駆除するが 不法入国者はどうなる
私は138億歳であるビックバンがなければ存在していない素粒子
夜中に暑くて目が覚めると扇風機が止まっていた おい働け
犬がお坐りをして「早く」と言っているが外は雨散歩には行けんぞ

後輩と

廣珍堂

実験の相方となつた後輩と五十センチの距離が怪異に
下駄箱は手紙を入れる場所でない隣の列に気になる名前
後輩と昇降口にふたり立つ折り畳み傘はひとつだけなり
吹雪きて風下にある後輩の肩に積もりし雪を見てゐる
後輩は迷はぬままにコンビニで肉まん買ひて先輩に出す
夏すぎて秋来るらし調理部の肉じやがの染みを洗ふ後輩
いつのまに二年生の女子たちに読ませられない歌集を読めり
妹のやうに戯れつく女子たちにひとりだけゐる女の匂ひ

isekaiとしての昭和

笛地静恵

四十度おひかえなすつておくんなせえ手めえ生国と発するところ昭和です
世を捨てていざなわれたる幽谷の霧のホテルの客は我のみ
タクシーをひろいシートへそしてこの世でない場所へ
手前取り自然にできる若者と奥をあさるは昭和の仲間
二階からヤキイモふたつ注文し取りに行くのはオイラの役目
バイト代すこし多めの晩飯はクロッケじゃなくメンチカツだぞ
安売りのギョーザパックは五つ入りさいごのいつこ半分こした
シャンプーの香りの好きな彼のため銭湯を出る濡れ髪を梳き

共犯

福山桃歌

暴風がつまびらかにするその前に逃げよう（どこへ？）なるべく遠くへ
まっすぐに落ちてくる雨受け止めて逆さになった傘が泣いている
穿たれていくつも空いた穴にまで注がれている猛毒がある
いつまでも止まない雨の中にいてだれもぼくらを許してくれない
同じように濡れるのならぼそばにいてどうしようもなく傷つけあつて
いまもまだ冷たいままの手を握る互いをあたためられないぼくら
罪ならばどうぞ裁いて死にかけの蝶をこっそり外に放した
ぼくらには落ちる地獄もないことを突きつけられる暗い真昼に

おでんの玉子

坊 真由美

よく泣いた園児が前を駆けてゆく 先生だった私はこよ
浪費家と言われた夏の一日からカマンベールが買えなくなった
使わないレジの袋の隅っこに私ひとりの国家がほしい
下書きの退職願いの「お願い」を「届け」に変えて聴く蟬の声
職業へ主婦の二文字を書き入れるたびにどんぐり踏んでみたい
キッチンで過ごす私を就活のスーツ姿の私が見てる
母さんのおでんの玉子は割れている（だって私は母さんだもの）
自信などないさ、それでも玄関を掃いて私は新品になる

都市計画

まさけ

前までは広々してた青空を切り刻んでく光ケーブル
駅前どころどころ変わる店たちを全部覚えてそうな猫たち
谷に行く廃線案が記事に出た明治キャラメルみたいな市バス
新しいアスファルトから上がる湯気あたしの恋は突如終わった
学校の手前道が広くなりクラスLINEの通知がウザい
はりぼてのお城みたいだ3日後に行くはずだったあの遊園地
もくもくと入道雲が湧き上がるあたしの怒りとおんなじ量の
まつ白になった真夏を満たすためめちやくちや入れるプールの予定

ほんこわ

御糸さち

フリー素材まるだしの鳩コピペして世界は平和.jpg
自作のバズル解けないでいる 大抵のことつてそういうものなんだろう
大卒の人は知らない 高卒も卒業できない夢を見ること
本当になかったこわい話ならいくらでもあるから話そうか
ちいさくてかわいいだろう誰だつて人間なんてものの器は
三十年経つてもかまを光らせてかまきりりゅうじ おう なつたぜ
誕生日めがけてそんな一斉にクーボン投げてるんじゃないよ
コンカフェのコンが何だか分からずに調べずにこのまま生きていく

うつくしい村 in the summer of 2025

水上歌眠

谷風のひととき風いで蝶ゆえにあなたは花の毒に詳しい
村の四季とは人間のためでなく夏の緑は透き通る黒
題名のない詩のように熊笹の語りかけには方向がない
くるしいとうつくしいとの距離感で父と母とにそれぞれの主
竹林に向けて撃つてはだめなんだ。こころの中を遠ざかる鹿
忘れられてもピアノはピアノであったこと 長者屋敷の壁は崩れて
夏ごとに村のページは散逸しすべては川面のきらめきの中へ
うつくしい村を離れて戻れない異変まみれの道を行かねば

近景——二〇二五夏

南の島

海も見ず恋もせずとも詠めるけど言葉忘れるくらいのひかり
いいね押すつもりで投票する未来わるいいねボタンは押せませんから
マヨネーズぶすっさみしいままでいよう心スナップえんどうになる
てのひらでハートの形に出たシャンプーなんて乙女になるとこだった
東京で渴く瞳に目薬を見上げた網棚「音楽と人」
芽が出ない花が咲かない朝顔は八月間際の群青だった
写真撮ろ！現在をすでに過去として捉えているから写真を撮ろう
辞める人消えない会話ずれる野球波があるから波乗りできる

はじめての命だったね世界から月がこぼれたうさが跳ねる
朝焼けとともににはじまる毎日が夜を迎えたうさが跳ねる
玉響と言うんだってサ、幾億のゾウリムシよりうさが跳ねる
十月を待つやさしげなおんなからにんげんになるうさが跳ねる
爪を塗る青色に塗る存在を固定していくうさが跳ねる
階段に落ちてる毛玉いとおしさ侵食してくうさが跳ねる
窓際に暮らすリボンの双生児ちぎれる前にうさが跳ねる
目のまわる角度ですすむ時間から弾き出されたうさが跳ねる

ユニセフ

六厥めれう

わたしよりひどい暮らしを見てみたいかつて住んでたアパートの窓
町医者と違う矜持で生きている軍医みたいな感情がある
西向きのケースの中のサンプルのうどんの汁がどす黒くなる
害虫に効くスプレーと聞いたのに少し呼吸が怪しくなりぬ
ユニセフにうそのユニセフあることを同じ人から繰り返し聞く
人ならば省いてくれる溜め息も文字起こしする人工知能
顔文字を使わずに書く文章のどう結んでも不穏な堅さ
西郷にかならず「どん」を添えている薩摩のことはわからないけど

夏味

森内詩紋

クラッカー噛み割ったような月の下片足立ちであなたを思う
アイスラテ頭も胸も冷えていく ねえ今なんて僕を呼んだの？
新月になると誤作動起こす恋ラムネの泡じゃなだめられない
ピスタチオのバームクーヘン一片の緑染しみゆつくりと食う
7度2分ミントキャンディ舐めながら弱音を「ME」しようか迷う
白桃のゼリーの海を泳ぐ夢 岸にあなたが居ればいいのに
色つきのひやむぎよりは蕎麦がいい明日あなたと食べるとすれば
手のひらに振り出す白い金平糖晩夏は甘く淡くてもいい

一首評

そらよみ

前号の「うたそら」から
気になった一首をとってあげて
200文字くらいで語る
一首評のコーナーです

雨の日に歩くときだけ思い出すわたしの靴
は布製である

くろだたけし

雨に濡れる。酷ければ服は出先で買い足し着替える
人もいるだろう。しかし、靴を買う人は少ないと思
う。つまりこの作中主体は、この後一日を終えて帰宅
するまでじっと濡れた足のまま、歩き続ける。
「わたしの靴」は「布製」という、愛着、からのどこ
かしよんぼりとした諦めへと変化してゆく下句。飄々
とした詠みぶりの中にユーモアが続く連作の、1首
目です。

一首評

寿司村マイク

一首評

西鎮

ひとり暮らす家の二階にそのままの学習
机と『森田療法』

寿司村マイク

『森田療法』は森田正馬が「あるがまま」を受け入
れ「とらわれ」から脱すことを目標とした国産の心
理療法だ。学習机はきつと主体が子どもの頃に使っ
ていたものだろう。この一首が含まれる「終活の家」
の連作では主体と母の老いが示唆されているが、子
どもの記憶のまま残る学習机と老いを「あるがまま」
に受け入れようとしている主体の対比が静かに示さ
れていると思う。

一首評

がね

一首評

中村成志

濁流の真中に立って止まれよと叫んでいる
だけここは教壇

南の島

中学校教諭の苦勞が伝わってくる連作。引用した四
首目は、多感な中学生集団の威力を感じさせる「濁
流」の比喩が効いている。濁流は教室を呑み、学校
という職場そのものを呑み込むのだろう。八首すべ
てが濁流の景と思うと、味わいが増す。ときに無力
さを感じながらも、教壇という危険水域ギリギリの
岸辺で踏ん張り、濁流を導くために叫ぶことをやめ
ない。読者として、教室の外から全力で「お疲れ様
ですー！」と叫ばせてほしい。

一首評

北谷雪

足先が冷えないうちに寝る 遠い眠りの道に踏み出していく
傘ささず白夜のやうな街を往くペトリコールの梅雨寒のなか
沢山の氷でコーヒー冷たくしマーガリントーストを美味しく食べる
アイミティー 冷コー アイティー アイレティー コーヒーにだけアイをつけない
あずきバーくわえたままで電話するとくに言いたくないことはないのだ
熱戦の余韻のなかで冷えていたビールもぬるくなってしまうた
始まらない冷やし中華もあるでしようなかったものとして8月は
奮発し冷感シート買った夏ついに安眠の道が開けた
それはもう優しさじゃない冷酷な王のつもりで君を諭した
青色の冷たいゼリーを掬いとる星の術者を想わせる匙
父はすぐギョツとするからこの店のお冷やはレモン味だとおしえた
夜光虫ただよう海は寂しくて知らない町の灯のように見る
冷水に毒を浸して裸する穢らわしくて穢らわしくて
冷麺の梨とかサラダの林檎とか苦手なひとが苦手なままだ
冬の夜冷凍庫のなかかき氷想像してみる 熱帯夜の寝屋
大玉のスイカよ川で冷やされて揺れる間に何を夢見る
この恋のもつとも跳ねたささやきをよみがえらせて注ぐサイダー
できるだけ冷たい水で洗顔をしたい赦されたいまいにちに

◆ 麻倉ゆえ
◆ 新井きわ
◆ 石川順一
◆ 宇祖田都子
◆ 泳二
◆ 歌島孟
◆ がね
◆ 廻れ井戸
◆ 河岸景都
◆ 川瀬十萌子
◆ 北谷雪
◆ 橘高なつめ
◆ 久保田毒虫
◆ 西鎮
◆ 条咲泪
◆ せいや
◆ たえなかず
◆ 千原こはぎ



吐息って温めるもの？冷ますもの？君はどっちがいいと思うの？
エスプレッソ／アフォガードフ／ラペチーノ微笑みのお兄さんのまえ遠い目をして
幽霊の自販機があり（自販機の幽霊ではなく）、すべてつめた〜い
なんらかの罪を犯してキンキンに冷えたダンテの地獄に行こう
ソーダ水冷たさを舌で分けあってこっそり笑うだけでよかった
冷蔵庫のドアを開ければ少しずつ冷えた時間がこぼれはじめる
ぶんぶん空冷エンジン響かせて昭和の軽自動車は行きぬ
真夏でも毛皮を脱げぬ猫のためせめて毛梳きの風を通せり
冷蔵庫抱きしめながら泣いちゃった人肌よりもすこし熱くて
キンキンに冷えてく氷の硬さを思うきつと今でも氷河は青く
冷え切った肩にひと布滑らせてひと夏の恋は終わりと告げて
納得がどうもいかない盆の昼義妹に茹でる冷麺の熱
冷たさを確かめたくて手をのぼす必死にまわっているその語尾へ
コーヒーというよりアイスコーヒーの黒さのドレスが要る夜がある
真夏でもホットのわたし真冬でもアイスのあなた二つでいよう
冷たくて眠れぬくらいくらとした熱がいい さいごをわけて
黙り込むことを冷静というのならNo Warの叫びなんと名付ける
冷ください温もください愛ください春と秋のこと返してください

◆ 内藤うく
◆ 中村成志
◆ 西淳子
◆ 畑 依裕
◆ 薄荷。
◆ ひなお
◆ 廣珍堂
◆ 笛地静恵
◆ 福山桃歌
◆ 古井 朔
◆ 真岡まな
◆ まさけ
◆ 御糸さち
◆ 水上歌眠
◆ 南の島
◆ 水也
◆ 森内詩紋
◆ ルミナ

望遠鏡

28

短歌にまつわるあれこれについて

自由きままに書くページ

今号のテーマと書き手さんは…



書き手

森内詩紋

テーマ

いにしえからの詠いかた

はじめに

小学生の頃、はじめて読んだ万葉集の中で強く魅かれたうたがあった。

相思はぬ人を思ふは大寺の餓鬼しりえの後に類づくがごとく
／笠女郎『万葉集 巻四 六〇八』

これほどまでにユーモアをもつて失恋を詠んだうたが奈良時代にあつたとは私には驚きだった。

短歌における〈私性〉というのは、作品の背後に一人の人の――そう、ただ一人だけの人の顔

が見えるということです。

（岡井隆 『現代短歌入門』一九九七 講談社）

岡井の言葉を借りるなら、万葉集中の笠女郎の二十九首はどれも私性のはつきりとうかがえるうたである。

これらのうたが贈られた大伴家持との関係が実際はどうであつたかは、後世の私たちにはわからないことだが、少なくとも当時の笠女郎の感情は直接的に伝わってくる。

これは和歌という詩形が、短いながらも、恋という強い感情を表すのに適していたからであらう。

そこで今回は、短歌の先祖である万葉集の表現様式の分類に沿って、現代の恋の短歌に触れてみようと思う。

万葉集の三部立と表現様式上の分類

ここで確認のため万葉集の部立の概略を押さえておこう。

万葉集はその内容が相聞、挽歌、雑歌の三つに部立（分類）されている。

相聞は「消息を通じて問い交わすこと」を意味し、本来は親子や友人間での往来も含まれたが、万葉集中では主に男女間の恋愛を意味する。

挽歌は文字通り人の死を悼むうた。雑歌は「くさぐさのうた」と読み、相聞でも挽歌でもないもの全てを含む。公的な場でのハレのうたや正統的な四

に笑つてしまつたという自己発見の一首となろう。

いづれにせよ、この一首の重心は結句にあり、四句までは、その直接的に述べられた心情を支えるものといえよう。

読者からすれば、心をさらけ出すこの正述心緒という詠いかたは、あからさまであればあるほど作者の私性に迫るものとなりうる。

たとえて隠して詠む

やさしい、と言えば満足するひとと西日まみれの信号に立つ
／古橋紗弓

体型も髪もわたしの呼び方も違う涼しいその声色で
／熊谷香織

こんなふうに林檎の花は咲くだろうあなたのながいながいまばたき
／高田つき

ぼくじゃない誰かに向いた視線上を渚のように歩きはじめる
／西鎮

湖のほとりで団子わけあえば絵画の如く春の陽は射す
／小倉るい

「やさしい」の一言の裏に置かれた感情。言いさしで指摘される「涼しい声色」。「花の咲き方と同一視されるまばたき」への作中主体の視線。渚という揺らぐ境界線上をゆくおもいは明確にされず、湖畔での絵画的景色からは強い心情は読み取りにくい。

譬喩歌はたとえて隠すのが本義であるがゆえに、一見してテーマとのかかわりに気づきにくい側面が

季歌も雑歌の扱いである。

さて、万葉集の表現様式上の分類は四つある。寄物陳思・正述心緒・譬喩歌・詠物歌である。

このうち詠物歌は季節の風物などを詠むものであつて、近・現代短歌では他の三つに被る要素が多いため今回は取り上げない。

寄物陳思きぶつちんしとは「ものによせおもいをのぶる」うたであり、物に行動や感情を重ねて表現するものだ。

正述心緒せいじゆしんしゆとは「ただにおもいをのぶる」うたであり、心に思うことを直接詠むもの。

そして、譬喩歌ひよかは景物だけを表面的に詠むことで、おもいを隠して表現するものである。

ものよせて詠む

あの恋はガリガリ君と同じ色何処まで食めど澄みきつた青
／間之口葵一

アマゾンの蝶の羽ばたき彼のペン落としてくさい手を重ねたい
／天祐実

君が歯を立てた林檎の白を見て恋の記憶は傷かと問うた
／大下ぐりこ

空気中の酸素と同じ割合でああなたの胸に存在したい
／日詰菊

海のない町に生まれた僕だからこの一面の青はきみだよ
／河原こいし

この五首はいずれも寄物陳思歌といえよう。

青い氷菓に恋を重ねる。蝶の羽ばたきに託つけて

でることもある。また、寄物陳思との境目もはつきりとしているわけではない。

だが、それぞれの一首と向き合う時、読者の中ではその景に刺激されて想像力がたちあがる。

作中主体への、あるいは作者への、読者の歩み寄りが必要とするからこそ、譬喩のうたはその深さを内蔵できるのだ。

こうしてみると、万葉集の表現上の分類は現代でも通用する考えかたであることがわかる。

もちろん短歌は恋のみならず森羅万象を詠いうる。

であるからして、これらの表現上の分類は、これから詠まれる短歌にも充分当てはまり、引き続き認知されていくであろう。

なぜならば歌人と読者の間には、相互に理解しあおうという通底した意思があろうから。

そしてそれは、和歌の時代から連綿と続いてきた相聞的な心情ともいえるかもしれない。

さて、以上の十一首は先般、X（旧 Twitter）上で恋の短歌を募集し、そこにご応募いただいたものである。

関係諸氏の御厚意に感謝するとともに、各一首への鑑賞はのほど私のXアカウントで発表することをごに申し添えて筆を置く。

希望を述べるうた。林檎の噛みあとに恋の記憶を見て取り、酸素の割合に自分の存在を重ねる。さらには恋の相手を海のごとき二面の青にたとえる。
作中主体が物に寄せた感情は、寄せられた物の大小に関わらず、あるいは飛躍しあるいは深まり、読者に染み込んでいく。ここで読者は、詠まれた事物と自分との関係を思いおこし、作中主体との感情の重なりや差異を味わう体験を得る。

これこそ寄物陳思歌の大きな特徴であり、また恋のうたに限らず近現代短歌に寄物陳思的なうたが多い根拠ではなからうか。

ただまっすぐに詠む

少し迷うところがあるが、ここでは柴田有理の一首を正述心緒として取り上げてみたい。

ついでのように人間味あふれて笑つてしまふあなたが好きで
／柴田有理

句切れの無い一首とみて「ついでのように人間味あふれて笑つてしまふ」までの部分が「あなた」に序詞的にかかると仮定する。すると、そのような「あなた」が好きであり、さらに何か含むおもいがあるという作中主体の姿が見えてくる。これは結句の言いさしの効果もあるが。

また、結句倒置の四句切れとして読むならば、作中主体が、恋する自分の感情に動かされ人並み

感想は
こちらまで!

Twitter(現X) ハッシュタグ

#うたそら

「うたそら」では Twitter(現X) での感想をお待ちしております。ハッシュタグ「#うたそら」をつけて、お読みになった感想をぜひお聞かせください。

短歌募集



2025. 29 25 10/31(金) 24時

8首の
連作

テーマ詠
「実」1首

一首評
「そらよみ」

2025. 30 25 12/31(水) 24時

8首の
連作

テーマ詠
「初」1首

一首評
「そらよみ」

投稿先等、詳しくはうたそらのご案内ページをご覧ください

<http://kohagiuta.com/utasora/>

連日猛暑が続き、まさに夏!(ちよつと夏すぎ!)といった日々ですね。皆さま体調など崩されていないでしょうか。
わたしは前号の宣言通り、結構あちこちに出かける夏を過ごしています。けれどももなく翌日はバテて倒れているので、もう少し体力があるといいのにな……。皆さまはどんな夏をお過ごしでしょうか。
次号へ切は10月末、発行は11月頭です。テーマ詠のお題は「実」。ぜひご参加ください!

編集鳥 千原こはぎ

今号の
うたそら

2025.
September

No. 28

参加歌人様

51名

連作欄 39名

テーマ詠欄 36名

一首評 5名

リレーコラム
望遠鏡

森内詩紋 さん

リレーエッセイ
いちいちえ

武藤寛和 さん

ご寄稿いただき
ありがとうございました!



illustration:
kohagi chihara

編集後記

音楽は流れる為に波になり風にならない湖である

武藤寛和



僕は音楽に疎いと思って人生の大半を過ごしてきた。
なんだろう、たぶん中学生の頃友達がかラオケで歌うEXILEとか湘南乃風にピンと来なかった時からだと思うんだけど、メジャーシーンとは距離があるもんだ、と思って暮らしてきた。
そんな自分でも音楽との出会いは結構明確に覚えていて、小学生二年生の頃、同級生の家のCDレコーダーでポルノグラフィティの『アポロ』を聴いたのが、僕の音楽にまつわる記憶の最初だ。二人でサビを踊り狂った、広島島のマンションの片隅で、だった。確か彼女のお兄ちゃん

か誰かが持っていたCDを、部屋の中ではなく廊下だか部屋の垣根あたりだかで、だった。イントロではロケットの飛び立つエンジン音が低く鳴り響き、期待感がマックスのところまで、岡野昭仁のハイトーンボイスが「僕らの」と歌い出す、サビの一番美味しいところから歌い出すこの曲は「アポロ11号は月に行ったって言うのに」と僕らを送り出す、それと同時にメロディが奏でられる。そんなにややこしくは考えられないその頃の僕は訳もわからず踊って、歌詞のわかる部分だけ熱唱する、踊り狂う友人のまだ幼くて細い骨ばった腕の揺れを、なんとなく思い出せる。彼女の母親がどこかに居るはずの友人の自宅マンションで、僕たち二人だけの熱をエアコンの涼しい風が取り巻いていた。歌の終わりは覚えていない、加速し始める熱狂だけが、あの幼い日の瞬間を思い出させる。
と、まあ、そんな瞬間を経て、その友人ともあつけなく疎遠になった中学生時代、初めて買った(誕生日プレゼントだったから買って貰った訳だけど)CDはポルノグラフィティのベストアルバムだった。特に熱を上げて追いかけたわけではなかったが、同じ広島出身の彼らのことは愛

着深く思っていて、テレビなんかで見かける度に見守っているような、共に歩んできたような、不思議な心地になる。
さて、ここまで長ったらしくテーマからやや逸れた内容の文章を書いてみたが、どうだろう、この文章は僕の一瞬の、一曲への熱狂の話であって、確かにヒットチャートの話ではない。「ヒットチャート」というテーマを瀬斗くんの短歌から摘んだ時には思いもしなかったが、「ある時」のヒットチャートではなく「僕の」ヒットチャートの話をしようとするこんな風になってしまふ、あの広島島のマンションの一室みたいな一瞬が、高校の文化祭でテーマ曲のNICO Touches the Walls『手をたたけ』を合唱している間にも、大学生時代下宿先のアパートで八十八ヶ所巡礼『金土日』を聴いていた瞬間にもあつたし、今家で唾奇×sweet william『街から街』を聴いている時にもある。今例えばApple Musicのトップ100を開いてみればほとんど上位はMrs. GREEN APPLEに占められているが、僕とあなたが出逢った時には「あなた」のヒットチャートを／について、聴かせてほしい。

28

リレーエッセイ

いちいちえ

前号の人の短歌から一語を摘んでそれをテーマにエッセイを書くページ
今号のテーマと書き手さんは...

テーマ ヒットチャート
書き手 武藤寛和



うたそら 第28号

発行：2025.09.01

編集・制作：千原こはぎ

@kohagi_tw <http://kohagiuta.com/utasora/>